

和歌山市における温泉旅館の経営動向

浦 達 雄

I. はじめに

1. 研究の背景

厚生労働省の統計¹⁾によれば、わが国の旅館業は、旅館営業数でみると、2010年3月末現在、50,846軒を数える。2001年3月末現在の64,831軒に対して、伸び率は0.79倍を示し、減少傾向が著しい。これに対して、ホテル営業数は8,220軒から9,063軒へ増加し、1.11倍の伸び率を示している。旅館の減少傾向に対して、ホテルの増加傾向は明らかである。こうした中で、温泉旅館は、環境省の統計²⁾によれば、2010年3月末現在、14,294軒を数え、2001年3月現在の15,512軒に対して0.93倍を示し、やや健闘している。宿泊施設における温泉の有無は集客を図る上で大切な機能であり、温泉掘削を試みる宿泊施設も少なくない。

表1は、近畿地方における温泉地統計を示したものである。白浜温泉・熊野本宮温泉郷などを有する和歌山県は49カ所の温泉地が成立し、近畿地方では、兵庫県74カ所・三重県71カ所に次ぐ3番目の温泉県として機能している³⁾。和歌山県の県庁都市、中核都市である和歌山市は、2010年3月末現在、ホテル営業14軒・旅館営業114軒を数える⁴⁾。21世紀に入って宿泊施設の過当競争・競争激化が進み、個性を主張するために温泉掘削を行い、温泉を新たに付帯した旅館が登場している。ここでは和歌山市に位置する新旧の温泉旅館を取り上げ、温泉付帯による旅館経営の優位性を調査することで、その意義を明確にしたい。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、和歌山市における温泉旅館の経営動向について、その実態を明確にすることである。和歌山

表1 近畿地方の温泉地統計

府県	温泉地数	湧出量 L/min	宿泊施設数 軒	収容定員 人	年間延宿泊利用人員 人	湧出量 L/人
三重県	71	47,987	319	30,142	4,070,295	1.59
滋賀県	22	9,766	43	8,838	1,017,743	1.10
京都府	40	17,709	180	8,629	1,210,623	2.05
大阪府	34	34,672	41	9,850	1,592,814	3.52
兵庫県	74	47,620	353	33,636	3,096,100	1.42
奈良県	34	10,168	73	7,408	430,603	1.37
和歌山県	49	57,748	212	32,079	3,697,828	1.80
近畿地方	324	225,669	1,221	130,582	15,116,006	1.73
全国	3,230	2,753,459	14,294	1,407,164	127,929,516	1.96

(注1) 環境省の資料により作成

(注2) 2010(平成22)年3月末現在、宿泊施設のある温泉地数

(注3) 湧出量 L/人は、収容定員1人当りの湧出量

市内の旅館は、市街地では都市旅館、観光地の和歌の浦や紀三井寺では観光旅館が成立し、高度経済成長期まで繁栄した。しかし、バブル経済の崩壊、さらには平成不況後は転・廃業が続き、減少傾向が続いている。ここでは、和歌山市における新旧の温泉旅館3軒を事例として取り上げ、その経営動向の実態を明確にし、今後の旅館経営のあり方や方向性を探るものである。

3. 従来の研究成果

筆者は、これまで主に温泉地における小規模旅館の経営動向について、その実態を明確にしてきた(浦 1992 など)。その調査の手法は経営者に対する聞き取り調査に主眼を置くものであった。つまり細かなデータ分析ではなく、趨勢の把握に努めた。

II. A 旅館：自噴温泉が人気を博し、宿泊客が徐々に増えてきた温泉施設付帯の温泉旅館

1. 早い時期の温泉掘削

A 旅館は和歌山市鳴神に位置する(表2)。初代経営者が1965年に温泉掘削の許可をとる前に、付近の寺院の記録で温泉湧出の記述を見つけ、温泉のボーリングに着手したのである。温泉の深度は501m、源泉温度は26℃の自噴泉となる。

旅館は鉄骨3階建、敷地面積は3,300m²、延床面積は6,600m²となる。客室は12室(収容人員は31人)を数え、すべてが和室(トイレ付)で、内訳は6畳間・8畳間・12畳間などを示す。主な付帯施設はロビー・温泉施設・レストラン・大広間(60畳間。舞台付)・中広間(30畳間)・整体道場・売店などがある。毎週木曜日が休館日となる。

温泉施設の特徴は、温冷入浴法を取り入れていることである。男女別大浴場の中で、浴槽4ヵ所すべての温度を変えている。泉質はカルシウムの含有量と鉄、炭酸ガス成分が多いので、療養泉としての効果が認められ、炭酸鉄泉では関西最強だと温泉マニアの推薦を受けている。

1968年の開業当初は日帰り施設のみで営業をしていたが、顧客の要望で1973年に宿泊設備を整備した。これで遠来客の湯治的な利用が可能となった。1993年8月1日、大浴場のリニューアルが完成し、露天風呂・サウナ・26℃の源泉風呂の組み合わせのシステムを完成させた。さらには、営業時間の延長を行い、23時までの営業体制を確立したのである。

宿泊料金は2007年に大幅な改訂を行なった。それまでは休前日の料金アップが当たり前の時代であったが、湯治療養客を考慮して平日と同一料金とした。これで曜日気にせず、3泊以上の滞在が出来るようになった。さらには2名1室をベースにした料金設定も変更し、1人利用・2人利用・3人利用も同一料金とした。

1人当たりの宿泊料金(1泊2食。2人で1部屋利用)は9,450円(税込)、1泊朝食付7,875円(税込)となる。2食付の連泊プランは2日目より500円割引の対応になる。施設・設備の大きなりニューアルが出来ないために、売上的大幅な増加は見込めないが、快適な居住環境を提供するために、客室でのウォシュレットトイレと液晶テレビの地デジ化などを行った。

今期(2010年3期)の年商は1億3,000万円で、その内、宿泊部門は5,000万円弱と健闘している。年商からみたオンシーズンは5・8・10・11月、オフシーズンは6・9・12・2月となる。市場構成は宿泊客・日帰り客共に、近年、広域化が進んでいる。宿泊客は和歌山県内2%、和歌山県外98%の構成で、従来の関西圏だけでなく、北は北海道から関東・東海・中国・九州、さらには海外にまで及び、韓国・中国・台湾の方が徐々に増えている。これは温泉マニアの口コミ効果と全国紙への広告宣伝、インターネット活用によるPR効果だと思われる。さらには2004(平成16)年7月、熊野古道と高野山の世界遺産登録で、認知度アップも影響している。

申し込みの形態は、直(電話)60%・直(オンライン)10%・エージェント0%・ネットエージェント30%となる。ネットエージェントの割合が伸びている。

2. 毎日灌水する温泉施設

A 旅館のスタッフは家族2人・正社員3人(マネージャー・料理長・営業主任)・パートアルバイト(25人程度)からなる。重要な仕事は温泉管理の当直となる。当直は温泉清掃・張り込み・沸かし込みとすべてをこなす。営業終了後、毎日、温泉浴槽のお湯を流し、清掃を行っている。費用はその分かかるが、循環及び殺菌が出来ない泉質であり、毎日の灌水を自ら義務付けている。

温泉入湯料は朝8時より大人1,000円・子供600円で、17時以降は割引制度を実施し、大人600円・子供300円となる。無料の休憩室(大広間)を用意し、100円でカラオケが楽しめる。その他のサービスとして、回数券さらには毎月26日を風呂の日とし、次回の利用の際の半額券を渡している。2009年から学割の入湯料金

を設定し、時間帯に関係なく300円引きを行っている。

料理は和歌山県の新鮮かつ豊富な海・山・里の食材を活用している。ボリュームメニューを特色とし、主な料理として四季彩会席・鍋三昧プランなどがある。基本的な夕食は身体にやさしい10品の料理をメインに季節の食材を組み合わせている。近年、クエが年中提供出来るようになり、好評を博している。

日帰り客の利用する食事処は2009年3月に閉鎖し、場所を変えて、昼のみの営業でうどんと軽食で対応している。しかし、日帰りプランの充実を図り、入湯・個室休憩・会席料理を4,250円から予約制で提供している。温泉・料理以外に各種イベントも充実している。年4回ではあるが、林家染丸ぶろでゆーす花山温泉鳴神亭の落語会の開催、さらには毎月2回開催の花山陶芸クラブがある。

温泉以外で自然の汗のかきたい人には、花山うららくらぶで里山の整備を体験し、季節によってたけのこ掘りやしいたけ栽培の収穫、その他には近隣の小学生と植樹会を毎年開催し、ふれあいを深めている。

花山(標高87m)の整備はボランティアと一緒に2001年頃から実施している。里山としての花山の復活と元の眺望を取り戻すための環境整備である。地域に愛される温泉を目指して、薬師如来を祀り、毎月8日のおつとめに始まり、初薬師には餅まきを毎年行なっている。

Ⅲ. B旅館：各種プランの充実、温泉施設の拡充、サービス力アップなど、総合力の強化で業績を高める温泉旅館

1. 温泉施設の拡充

B旅館は和歌山市新和歌浦に位置する温泉旅館である(表2)。旅館の創業は大正時代だが、A旅館は2007年に経営譲渡で営業を開始した。その際、洋風イメージをプラスした。近くに姉妹館を経営する。

敷地面積は9,427m²、建物は鉄筋7階建(1964年建築)、延床面積は8,583m²を数える。客室はすべてが和室で38室(収容人員200人)、標準客室は10畳間となる。客室は全室オーシャンビューで、和歌の浦の風光明媚な景観が楽しめる。露天風呂付客室は2室を数える。

主な付帯施設は大広間(1室。200畳間)・ラウンジ・売店・宴会場(8室)・温泉施設などを示す。温泉は1995年に掘削した。温泉施設は男女別内湯・男女別露天風呂・貸切風呂2カ所となる。貸切風呂は2009年5月16日に整備したもので、バリアフリータイプとオン

シタイプがある。オプションでバラ風呂が楽しめる。利用料金は通常50分3,990円だが、バラ風呂はプラス5,250円となる。露天風呂は眺望が開け、夜になると和歌山マリーナシティなどの夜景が一望できる。

設備投資は毎年のように行い、2008年は露天風呂付客室の整備、2009年は6階のフロアと各室の改修などを行った。2011年は外壁塗装と5階客室フロアを改装し、バリアフリーの客室に整備する計画となっている。

今期(2010年2月期)の年商は4億3,700万円を数え、ここ数年、順調な伸びを示す。年商の内訳は、宿泊部門80%・日帰り部門20%の構成である。2010年は前年対比130%の伸び率を示している。

1人当りの宿泊料金(1泊2食。2人で1部屋利用)は0.9万円から2.8万円に設定し、標準は1.4万円となる。宿泊の申し込み形態は直(電話)50%・直(オンライン)10%・エージェント20%・ネットエージェント20%の構成である。

1人当たりの平均宿泊単価は1.4万円、同消費単価は1.7万円となる。日帰り客は平均5,000円の消費となる。稼働率は客室75%・定員60%を占める。日帰り客のシーズンは11・5・10・12・1月で、忘新年会・新緑のシーズンが忙しい。

年商からみたオンシーズンは、8・11・5・10・12月で、夏とGW、秋の観光シーズンが忙しい。これに対して、4・2・1・6・7月はオフシーズンを示す。冬場と梅雨のシーズンに客足が減少する。

市場は和歌山県内60%・和歌山県外40%の構成で、県外では大阪府が一番多い。客層は、同伴50%・団体20%・家族10%・グループ10%・その他10%で、小間客が多い。目的は観光60%・宴会30%・スポーツ10%などである。

2. HPの充実

B旅館のスタッフは正社員30人・パート10人を数える。正社員の内訳はフロント12人・客室10人・調理6人・その他2人などとなる。料理は地産地消を心掛け、魚介類は地元の雑賀崎漁港や和歌浦港から直接仕入れている。名物料理は和歌山名産のクエ鍋料理・地魚のお造り(太刀魚など)がある。

各種プランも充実する。日帰りプランでは4,200円・5,250円・6,300円・9,450円のコースを10名から受け付けており、最寄駅から無料送迎バスを行っている。秋の宿泊プランとして秋の食祭美味プランがある。2人客

の場合は1万5,750円で提供する。平日限定では60歳以上で得々プラン(2人客)9,450円・記念日プラン(2人客)1万6,800円などがある。圧巻はタク旅で、和歌山市内を主として地域は限定するが、自宅と旅館間のタクシーでの送迎付宿泊プランである。

2010年9月より自社HPの強化を図っている。1人の専属スタッフを採用し、タイムリーなHPの更新、ブログでの情報発信を行っている。

各種サービスも充実する。ウエルカムドリンクのサービス・ウエルカムボードの設置などを行い、顧客感動を演出している。ウエルカムボードはエレベーターに貼った手紙で、こうしたちょっとしたアイデアがB旅館の魅力を高めている。

スタッフの雇用も積極的にすすめている。20歳代のスタッフの採用・K-Bix(旅館ソリューション)の導入・決算賞与などを導入している。20歳代のスタッフは10数人を数え、活気と自由な発想で、生き生きさが接客サービスなどで好評を博している。経営上の悩みは組織力の強化である。強化すれば、人件費が上昇し、これが難点となっている。

B旅館のセールスポイントの1つはスタッフのサービス力である。経営譲渡の際、ほとんどのスタッフがこの旅館の魅力は温泉・お風呂と答えたのに対して、経営者として目指す宿の考え方や方向性が一致した。「あなたに会いに来たよ」と言ってもらえる魅力ある旅館にしたい」が根底であり、いまその目標に少しずつ近づいている。経営方針はグループからチームへの成長を目標として日々努力を重ね、トータルバランスのとれた地域を代表する旅館を目指すことである。

IV. C旅館：設備投資のたびに、屋号の変更を行い、時代を先取りした経営を推進する地元で評判の老舗の宿泊施設

1. 屋号の変更で営業形態を変革

C旅館は和歌山市の紀三井寺参道の入り口に立地し、限界に残る唯一の宿泊施設である(表2)。創業は1882(明治15)年で、現在の経営者は4代目に当たる。創業当初は紀三井寺そして熊野詣での参詣客が多かった。

C旅館は旅館をベースとしながらも、商売の形態や機能を変えるにあたって、新屋号で意気込みを示し、今日に至っている。当初の屋号はC亭で、渡し船の切符販売を兼業した。和歌の浦と紀三井寺を結ぶ橋は架設されておらず、小さな船で参詣者を渡していたのである。

その後は、観光旅館Cと改称し、1975年には大幅な増築(現在の本館)を行った。観光客と共に地元客を意識し、日帰り需要、つまり結婚式・宴会・会議などに対応したのである。さらに1989年、現在の屋号であるC旅館に変更した。増加するビジネス客の需要に対応するため、旅館の他にホテル(新館)を併設したのである。

旅館の敷地は11,550m²・延床面積は5,940m²で、建物は3棟からなる。その内訳は新館(鉄筋6階。ホテル棟)・本館(鉄筋5階建。宴会・会議棟)・別館(木造2階建、旅館棟)となる。客室は102室、その内訳は和室35、洋室67(シングル40・ツイン27)、収容人員はゆとりをもたせて、一般220人・学生団体400人としている。

付帯施設は温泉施設(男女別大浴場・露天風呂・サウナ・貸切風呂)・大広間5室(全体で495畳)・宴会場(食事処)8室(30畳が基本)・売店・レストラン・駐車場(無料220台収容)などがある。

温泉施設は2006年に付帯した。それまでは人工のラドン温泉(1975年導入)にしていたが、温泉掘削をすることで天然温泉となった。温泉井戸の深さは1,500mだが、1,300m地点から汲み上げている。顧客の要望と経営者としての夢をかなえたのである。

したがって温泉施設の名称は様々な願いを込めて「天然温泉花の湯」と命名した。ビジネス客にも無料で提供するが、日帰り入湯は800円となる。売店とレストランは外来からのウォークインを意識して、多角経営の貴重な施設となっている。この他に別の場所でみかん狩観光農園・青果物卸市場を経営している。

2. 地元客向け商品の開発

年商の目標額は10億円の突破となる。ピーク時は10数億円を売り上げたが、景気の低迷・旅行形態の変化(団体客の減少)など、経営環境は実に厳しい。年商の内訳は宿泊35%・日帰り65%で、日帰り客の多いことが特色である。日帰り65%の内容は宴会25%・昼食25%・土産10%などで、この10年間変化はない。宿泊の形態で見ると、ホテル30%・旅館70%となる。

年商からみたオンシーズンは8・11・12・4・1・12月、オフは2・9・6・7・10月となる。日帰りは12・11・1・4・5月が忙しい。宿泊客の市場は和歌山県内20%・和歌山県外80%で、県外では京阪神方面が多い。宿泊目的は観光25%・宴会会食20%・スポーツ20%・ビジネス15%・その他(法事など)20%となる。宿泊形態は1人客51%・同伴2%・家族7%・グループ15

表2 和歌山市における温泉旅館の経営動向

旅館	A	B	C
開業 温泉掘削 建物	1968年(新規開業) 1965年 鉄筋3階建	2007年(経営譲渡) 1995年 鉄筋7階建	1882年(新規開業) 2006年 本館:鉄筋5階、新館:鉄筋6階、 旧館:木造2階
敷地 延床面積	3,300 m ² 6,600 m ²	9,427 m ² 8,538 m ²	11,550 m ² 5,940 m ²
客室	12室	38室	102室 和室35、洋室67(シングル40、 ツイン27)
収容人員 付帯施設	30人 ロビー 温泉施設 レストラン 売店 整体道場 大広間(60畳間。舞台付)、中広間 (30畳間)	200人 ロビー 温泉施設 ラウンジ 売店 大広間(200畳間)	一般220人・学生400人 ロビー 温泉施設 レストラン 売店 会議室 大広間5室(全体で495畳間) 宴会場(食事処)8室(30畳間が基本)
温泉施設	男女別大浴場(露天風呂・サウナ・ 26℃源泉風呂付帯)。温冷入浴法の 導入	男女別大浴場(露天風呂付帯)・貸 切風呂など	男女別大浴場(露天風呂付帯)・貸 切風呂
主な設備投資など	1973年、宿泊施設整備 1993年、大浴場リニューアル 2007年、宿泊料金体系の変更	1964年、現在の建物完成 2008年、露天風呂付帯客室整備 2009年、貸切風呂整備・6階フロ アー・客室改修 2010年、自社HP強化 2011年、外装塗装、5階改修	1975年、現在の本館完成 1989年、現在の新館(ホテル)完成 1975年、ラドン温泉導入 2006年、温泉掘削
年商 宿泊と日帰りの内訳 オンシーズン オフシーズン 市場	1億3,000万円 宿泊35%・日帰り65% 5・8・10・1月 6・9・12・2月 和歌山県内2% 和歌山県外98%	4億3,700円 宿泊80%・日帰り20% 8・11・5・10・12月 4・2・1・6・7月 和歌山県内60% 和歌山県外40%	10億円(目標値) 宿泊35%日帰り・65% 8・11・12・4・1・12月 2・9・6・710月 和歌山県内20% 和歌山県外80%
宿泊料金 B&B	9,450円 7,875円	9,000円~2.8万円	8,500円~1.5万円 ホテル:シングル5,000円、ツイン 7,000円
申し込み形態	直(電話)60%・直(オンライン) 10%・エージェント0%・ネットエ ージェント30%	直(電話)50%・直(オンライン) 10%・エージェント20%・ネット エージェント20%	直(電話)70%・直(オンライン) 10%・エージェント10%・ネット エージェント10%
宿泊目的	温泉70%・観光25%・ビジネス5 %	観光60%・宴会30%・スポーツ 10%	観光25%・宴会・会食20%・スポ ーツ20%・ビジネス15%・その他 (法事など)20%
客層	同伴50%・家族30%・1人14%・ グループ5%・団体1%	同伴50%・団体20%・家族10% ・グループ10%・その他10%	1人51%・団体25%・グループ15 %・家族7%・同伴2%
スタッフ	家族2人、マネージャー、料理長、 営業主任。パート・アルバイトは25 人程度	正社員30人・パート10人。フロ ント12人・客室10人・調理6人 ・その他2人	家族3人・正社員35人・パート33 人・アルバイト10人。フロント4 人・客室8人・総括4人・調理8 人・売店5人・レストラン5人・ バーテン1人
企画商品 名物料理	四季彩会席、鍋三昧プラン、日帰り プランなど 地産地消。クエ鍋など	秋の食彩美味プラン・得々プラン・ 記念日プラン・日帰りプランなど 地産地消。クエ鍋料理、地魚のお造 り(太刀魚など)	サマー宴会・サンキュープラン・サ ンパチプランなど 地産地消。吉宗御膳・豪快山伏鍋
経営方針	地域に愛される温泉旅館	組織力の強化 トータルバランスのとれた地域を代 表する旅館	顧客に喜ばれる店作り 地元で愛される企業
特色	年中同一料金(特定日除く) 1人客・2人客・3人客も同一料金 浴槽は毎日灌水 連泊の場合は料金引きのサービス 料理はボリュームメニュー 各種イベント開催	ウエルカムドリンクサービス ウエルカムボードの設置 20歳代のスタッフが多い 新和歌の浦に立地	年中同一料金 良心的な料金体系 月に1度の全国紙4紙での広告 和歌山県百年企業表彰 紀三井寺の門前に立地

(注1) 経営者に対する聞き取り調査による。時期は2010年~2011年。

(注2) 経営数値は推定値。

%・団体 25% となり、団体・グループが目立つ。

近くに和歌山マリーナシティ（マリンスポーツ全般）、並びに紀三井寺公園（野球・サッカー・ラグビー・テニス・陸上競技）などがあり、小・中・高・大学生の大会や合宿の際の宿泊先として機能しているからである。したがって連泊の多いことも特色で、1泊 78%・2泊 15%・3泊 5%・4泊以上 2% を示し、平均泊数は 1.3 泊を数える。

申し込みの形態は直（電話）70%・直（オンライン）10%・エージェント 10%・ネットエージェント 10% などで、現在、オンライン率を高める努力をしている。ちなみに稼働率は客室 55%・定員 40% となる。

1人当りの宿泊料金（1泊2食。2人で1部屋利用）は 8,500 円から 1万 5,000 円に設定し、1万 500 円が標準料金となる。しかし、1人当たりの宿泊単価は 7,000 円、消費単価は 1万円を示し、ここ数年減少傾向にある。

ホテル部門はシングル 5,000 円・ツイン 9,000 円（2人）の料金設定を行い、週末料金の設定は行っていない。つまり宿泊料金は原則年中同一料金にしている。今の時代に合わせて顧客の要望に応えた結果でもある。

スタッフは家族 3 人・正社員 35 人・パート 33 人・アルバイト 10 人と多い。正社員の内訳はフロント 4 人・客室 8 人・総括 4 人・調理 8 人・売店 5 人・レストラン 5 人・バーテン 1 人などとなる。

C 旅館では企画商品が充実する。名物料理としては吉宗御膳・豪傑山伏鍋などがある。その他にはサマー宴会・各種宴会などがある。いずれも地元の漁港で水揚げされた新鮮な食材を用い、四季を演出している。野菜類は経営する市場からの直送で、地産地消の新鮮野菜となる。

サマー宴会は 5,000 円の企画商品で、期間は 6 月から 9 月末日まで実施する。ビール・ソフトドリンクのみ放題！（5人以上）、和牛ヒレ、活魚お造り（舟盛り付）など、料理 8 品がつく。15 人以上はマイクロバス送迎付（和歌山市及びその周辺）となる。その他にはサンキュウ 3,900 円、時期によってはサンパチ 3,800 円のプランがある。

直近の経営課題は東日本大震災の自粛ムードである。2011 年 3 月末はスポーツイベントが軒並み中止になって、数千人の予約キャンセルが発生した。しかし、日頃から地元客主体の経営実践をしており、3・4 月は対前年比 15% ダウンとなったが、5 月以降は平年並みにもどりつつある。

もう 1 つの課題は和歌山市内のビジネスホテル戦争である。市内はビジネスホテルの進出が続き、大手のホテルチェーンでも廃業をみる激戦区となっている。C 旅館では温泉施設の存在で、現状維持を果たしているが、他のホテルの経営は厳しいと思われる。

ところで、C 旅館は 2007 年度に「和歌山県百年企業表彰」を受賞した。経営モットーは「初代の志を継承し、その時代に似合う経営」である。経営方針は、顧客に喜ばれる店づくりとなる。そのためには良心的な料金体系が求められる。企業として長年継続するコツは地元から愛される企業であり、愛される努力を継続的に行うことが必要となる。地元志向を鮮明にするため、全国紙 4 紙に月 1 回のペースで広告を掲載している。タイムリーな企画商品を発表し、効果を上げている。

経営者として長年の夢であった温泉だが、メンテナンス・濾過などで苦勞が多い。もてる贅沢な悩みだが、温泉付帯の宿泊施設は市内には限定されており、さらに紀三井寺という昔ながらのパワースポットの存在は C 旅館の最大のセールスポイントとなろう。

V. おわりに

以上、和歌山市における温泉旅館の事例として新旧 3 軒を取り上げ、旅館経営の実態について観光地理学の立場で、その概要を明らかにした。その結果、次の点が指摘できよう。

- ①温泉ブームで、温泉施設の付帯が旅館経営上有利な条件を呈している。
- ②HP の充実・広告を通して、集客を行っている。
- ③企画商品をタイムリーに作成し、集客に成功している。
- ④地産地消を意識した料理商品に力を注いでいる。
- ⑤送客はネットエージェントの割合が増加傾向にある。
- ⑥経営姿勢や経営方針が明確であり、先読み精神に優れている。
- ⑦今後の課題は、旅館単体の活性化ではなく、地域全体の再生に向けて、旅館経営で得たノウハウを活かすべきである。
- ⑧今後の方向性は、温泉施設のネットワーク化である。温泉マニアを対象とした「紀泉温泉修験道」の実施など、温泉施設の優位性を周知徹底すべきであろう。

謝辞

本稿の作成に当たり、3 軒の旅館経営者（含むマネージ

ヤー)に対して、聞き取り調査を実施した。お忙しい中、親切に対応をして頂き、ここに記して謝意を表します。

注

- 1) 厚生労働省のホテル旅館概要 (HP)
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/seikatsu-eisei03/03.html>
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/seikatsu-eisei20/pdf/08-s01-03.pdf>
- 2) 環境省の温泉統計 (HP)
<http://www.env.go.jp/nature/onsen/data/index.html>
- 3) 前掲 2)
- 4) 前掲 1)

参考文献 (発行順)

- 浦達雄 (1992) 「温泉観光地における小規模旅館の経営動向」日本観光学会研究報告 24、31～38 頁。
- 浦達雄 (1996) 「奥能登における観光旅館業の経営動向」日本観光学会誌 28、94～100 頁。
- 浦達雄 (1997) 「和倉温泉における小規模旅館の経営動向」日本観光学会誌 30、53～58 頁。
- 浦達雄 (1998) 「別府温泉郷における旅館経営の動向」日本地理学会発表要旨集 53、248～249 頁。
- 浦達雄 (2000 a) 「21 世紀における温泉旅館経営のあり方」地域社会研究 (別府大学地域社会研究センター) 2、18～27 頁。
- 浦達雄 (2000 b) 「湯布院温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要開学記念特別号、9～16 頁。
- 浦達雄 (2001) 「山間温泉地における小規模旅館の経営動向—黒川温泉、長湯温泉を事例として—」大阪明浄大学紀要 1、1～10 頁。
- 浦達雄 (2002) 「泉佐野市犬鳴山温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 2、9～16 頁。
- 浦達雄 (2003) 「南紀白浜温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 3、7～15 頁。
- 浦達雄 (2004) 「黒川温泉における小規模旅館の経営動向」大阪明浄大学紀要 4、1～9 頁。
- 浦達雄 (2006 a) 「温泉観光地における個宿の経営動向」大阪明浄大学紀要 6、9～18 頁。
- 浦達雄 (2006 b) 「別府市鉄輪温泉における和風旅館の経営動向」総合観光研究 5、87～94 頁。
- 浦達雄 (2008) 「別府温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要 8、1～8 頁。
- 浦達雄 (2009 a) 「城崎温泉における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要 9、1～9 頁。
- 浦達雄 (2009 b) 「最近の和倉温泉における小規模旅館の動向」温泉地域研究 13、33～40 頁。
- 浦達雄 (2010 a) 「珠洲市における民宿の経営動向」大阪観光大学紀要 10、1～14 頁。
- 浦達雄 (2010 b) 「最近の黒川温泉における小規模旅館の動向」温泉地域研究 15、1～10 頁。
- 浦達雄 (2010 c) 「旅館再生企業・翼リポートの事業展開」観光研究論集 (大阪観光大学観光学研究所年報) 9、11～18 頁。
- 浦達雄 (2011) 「珠洲市における小規模旅館の経営動向」大阪観光大学紀要 11、9～16 頁。